

下野新聞
認知症カフェプロジェクト
過去の特集はこちら！



Vol.19 劇団「OiBokkeShi」の活動と思い

今年度の認知症カフェプロジェクトのテーマは「共生」。現在岡山県で劇団「OiBokkeShi」を主宰し、「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」という理念のもと、高齢者や介護者と共にする演劇公演や、認知症ケアに演劇的手法を取り入れたワークショップに取り組んでいる、宇都宮市出身の菅原直樹さんにお話を伺いました。

企画制作／下野新聞社 営業局

下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2023



菅原さんは劇団活動を経て介護職員として働き始められました。演劇の手法で認知症の介護を考えるワークショップを始めたいきっかけは何だったのでしょうか。

高校生の時に高齢の祖母と一緒に生活することになり、認知症を知りました。たんすの中に人がいるとか言い出し、おかしいなと気づいたんです。「たんすの中に人はいないよ」と言動を正すのか、それとも受け入れるべきなのか。すごく悩みました。

老人ホームに勤務して間もなく、介護と演劇は相性がいいと感じました。認知症の入居者から時計屋さんと間違えられたり、夜中にコールが鳴って、「今日は村の祭りか」と尋ねられたり。その言動を正すのではなく、受け入れる関わりもあっていいと思っただけです。認知機能に障害があっても感情に障害はありません。周りが否定や無視など不適切な対応をすると、感情が傷ついて行動・心理症状（徘徊や攻撃的言動、介護への抵抗）が生じることがあるのではないのでしょうか。僕だけでなく、ベテランの介護職員は自然と受け入れる関わり方もやっていた。

岡山県和気町に移住し、構

想を温めていた介護と演劇を結びつける劇団をやってみようと思った。一般の方には介護と演劇のどかが相性がいいのかすぐには分かりません。それを伝えるため、演劇体験を通じて認知症の人との関わり方を考えるワークショップを企画しました。そこに一番乗りでやってきたのが認知症の妻を介護している当時88歳の岡田忠雄さんでした。

今年、97歳になった岡田さんに三つの作品に出してもらった。年々忙しくなり、しかも1時間半舞台でしゃべりっぱなしです。足腰が弱って近所のスーパーに行くのも難しいのに、舞台でできることは増えているんです。岡田さん曰く、歩けなくなったら車椅子の役、寝たきりになったら寝たきりの役、最後には棺桶に入る役ができる。俳優という役割はいつまでも続けられる。すごくいいと思います。

一般の方には、認知症になるとすべてを忘れてしまう、家事や仕事は何もできない、無為の人になってしまふという誤解もあるのではないのでしょうか。

認知症になった人の役割をすべて奪ってしまうと、さらに症状が進行することがあります。役割を持たない人にならなければならない。自分が自分

ということは、自分が自分であるような感じがします。それが物盗られ妄想や、自宅にいるのに「家に帰りたい」と訴える帰宅願望につながることもあるかもしれません。介護してくる人の人は実は私から何か盗んでるんじゃないか、ここはかつて自分の家じゃない、みたいになつて介護者の思いと矢印が反対になつてしまふ。人は何らかの役割を求めているんです。介護者は何かしてあげてあげてあげてと言わなければならない、相手に何かしてもらってあげてあげてと返す場面をつくることも大切ではないでしょうか。その意味で、介護者は俳優と同時に演出家にもなる方がいいと思います。認知症の人が今でもできる役割を見つけてあげ

2016年に公演した「ぼくのパパはサムライだから」という作品の頭文字BPSDは認知症の行動・心理症状を意味します。主人公は夜中に刀を振り回す困った認知症のおじいさんですが、実は斬られ役俳優で活躍した過去がありました。それを知らず、問題になっていた行動の背景にある意味が見えてきます。見方が変わることによって介護の関わり方も変わってくるというこです。

今年の認知症カフェプロジェクトは認知症との共生がテーマです。菅原さんの演劇とも通じますね。

僕をつくる作品の大きなテーマです。今、岡山県余部町で認知症当事者の方と一緒に芝居づくりをしています。発達障害や高次脳機能障害の方もいらついています。それぞれの人生、得意や不得意を知った上で役をお願いすると、みんな生き生きと演技を始めます。認知症の方も、最初は失敗して恥をかくんじやないかとビックリされていましたが、それぞれの表現を尊重し合う信頼関係ができれば、どんどん主体的になり、真つ先に手を挙げてくれるようになります。

おかしただけ
岡田 忠雄さん(主演俳優)

OiBokkeShiの舞台に欠かせない看板俳優岡田忠雄さん(97)＝岡山市南区＝は、同じ年の妻郁子さんが認知症になり、20年以上自宅で介護した。当初は徘徊(はいかい)を繰り返すと手を上げてしまったこともあったが、菅原さんと舞台稽古を重ねるうち、食べたいものを尋ねて手料理を振る舞うようになった。今年1月に郁子さんが亡くなった後も毎食2人分を作る。「介護は大変でしたが、今も自分1人で食べる気にはなりません。生と死は誰もが必ず通る道。『舞台で死ぬ』日が来るまでやり続けたい」と話す。



演技をする看板俳優岡田さん(右)と菅原さん(左)



インタビューを受ける菅原さん

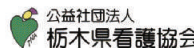
菅原 直樹さん

1983年宇都宮市生まれ。作新学院高、桜美林大文学部卒。平田オリザ氏主宰の青年団で俳優として活動した後、介護福祉士となり特別養護老人ホームなどで勤務。岡山県和気町に移住し2014年、古い・ぼけ・死から名付けた劇団「OiBokkeShi」(オイ・ボッケ・シ)を旗揚げ。「よみちひはくれない」を皮切りに、演劇を通して介護の問題を考える公演を続けている。芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞。現在は岡山県余部町在住。



公開稽古の様子

私たちは「下野新聞認知症カフェプロジェクト」を応援しています。



応援医療機関 赤羽医院 宇都宮第一病院 宇都宮リハビリテーション病院 皆藤病院 長島医院 那須赤十字病院 那須南病院 根本医院 真岡中央クリニック 吉沢眼科医院 (五十音順)

食べて、動いて たくさん笑いましょう フレイル予防

「フレイル」をご存知ですか? 「フレイル」とは、加齢とともに心身のはたらき、社会的つながりが弱くなった状態を指します。フレイルの予防は日々の習慣と結びついています。早い時期から適切な取り組みを行うことで、フレイルを予防することができます。やりたいことや好きなことを楽しく続けていくために、フレイル予防の3つのポイントである「栄養、運動、社会参加」を毎日の生活に取り入れ、今からできることを少しずつ無理なく始めませんか?

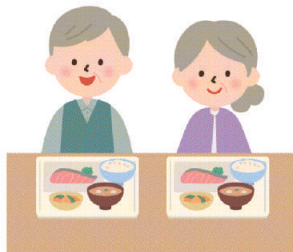
フレイル予防の3つのポイント

ポイント1

栄養

食生活・お口や歯の健康など

食事は活力の源です。バランスの良い食事を3食しっかりとしましょう。また、お口や歯の健康(口腔ケア)にも気を配り、体力、免疫力を維持しましょう。



ポイント2

運動

ウォーキング・ストレッチなど

運動は筋肉を鍛えるだけでなく食欲や心の健康にも影響します。少しでも多く体を動かしましょう。



ポイント3

社会参加

趣味・ボランティア・就労など

人と人とのつながりをもつことはフレイル予防に有効です。自分に合った活動を見つけましょう。

